

学生用暴力欲求質問紙の作成

境 泉 洋

本研究では、大学生の暴力欲求の強さを測定できる学生用暴力欲求質問紙の作成を目的とした。

予備調査において項目が作成された。首都圏私立大学の学生120名（男性56名：平均年齢=21.09；女性64名：平均年齢=20.74）を対象に暴力欲求を感じる場面について自由記述で回答を求めた。その結果収集された66項目と小林・高橋（1987a）が作成した28項目を整理した結果、47項目が学生用暴力欲求質問紙の項目として採用された。

本調査において、首都圏私立大学の学生359名（男子194名：平均年齢=20.53；女子158名：平均年齢=20.64；性別未記入7名）を対象に学生用暴力欲求質問紙を用いて調査が実施された。その結果、以下のことが明らかにされた。(1)「日常的暴力誘発」、「被害」、「自己欲求不満」といった3因子20項目で構成される。(2)信頼性、妥当性を有する。(3)暴力欲求は年齢が高いほど低くなる。(4)男子学生の暴力欲求は、女子学生よりも高い。

これらの結果は、大学生の暴力欲求の構造が中学生とは異なることを示している。本研究の結果をふまえ、暴力欲求が暴力行動に至る心理的過程について検討する必要性が議論された。

【問題と目的】

近年マスコミなどで青少年の暴力的な事件が多く取り上げられている。青少年の荒れ、いわゆる少年非行の深刻さは平成十年度版犯罪白書（法務省法務総合研究所、1998）の副題が「少年非行の動向と非行少年の処遇」とされていることにも象徴される。また、諸外国と比較しても日本の非行現象は深刻な状態にあるといわれている（澤登，1999）。このような現状において、暴力行動の発生と制御に関する研究を行うことには意義があると考えられる。

これまで暴力行動に関する研究は、加害経験のあるものを対象に行われてきた。しかし、近年みられる青少年の暴力事件は動機も不明確で、加害者を予測できないという非行の一般化（安香，1998；鈴木・西村・高橋，1989；尾木，2000）が特徴とされている。非行の一般化とは、1970年代から指摘されはじめた現象であり、それ以前までは特徴的だった非行少年の貧困や親の欠損といった環境的負

因、あるいは人格基底の偏奇といった負因の重要性が減じた状態である（鈴木ら、1989）。これらのことから、現在の非行研究には非行を行いたいという欲求をもつ潜在化した少年を対象にした研究を行う必要があると考えられる。つまり、暴力行動の加害経験のあるものを対象とした研究だけではなく、暴力行動を行いたいという欲求を持ったものを視野に入れた研究を行う必要があるといえる。

暴力欲求を持ったものを対象とした研究を行うことは、加害経験のあるものを対象とする際の制限を伴わずに暴力行為を行ったものと近似の対象者を検討できる利点があるとされている（小宮山、1983）。ここでいう制限とは、加害経験を聞くことによって対象者に与える心理的影響、保護者の調査協力への消極的態度、加害者・被害者の守秘義務などである。暴力行動の自己報告という方法もある（高橋・西村・鈴木、1982）が、自己報告では自己評価と他者評価のずれがあるという問題点が挙げられる。この問題に関しても、自己がどれだけ暴力欲求を感じるかは比較的容易に知覚できるものであり、他者評価の必要ないものであるため、暴力欲求の自他の評価のずれは少なくなると考えられる。これらのことから、暴力欲求について研究を行うことには、暴力行動、非行に関連する要因を検討する上で意義があると考えられる。

これまでに暴力欲求と関連があると考えられる攻撃性を測定する質問紙がいくつか作成されている。しかし、攻撃性と暴力欲求は異なるものと定義されており、これまでに大学生の暴力欲求を測定する質問紙は作成されていない。日本で標準化された攻撃性を測定する代表的な質問紙として日本語版 Buss-Perry 攻撃性質問紙（BAQ：安藤・曾我・山崎・島井・嶋田・宇津木・大芦・坂井、1999）がある。BAQ は「身体的攻撃」、「短気」、「敵意」、「言語的攻撃」の4因子からなっている。しかし、BAQ はタイプA 行動に特徴的な攻撃性を測定するために作成されたものであり、暴力欲求とは異なる心理的特性を測定する尺度であると考えられる。また、機能的攻撃性尺度（FAS：大淵・山入端・藤原、1999）も攻撃性を測定する代表的な質問紙である。FAS は、「回避」、「強制・影響」、「制裁・報復」、「自己表現」の4因子からなり、攻撃性の機能を測定するものである。そのため、FAS は暴力欲求を測定する尺度とはなりえないと考えられる。さらに、暴力欲求を測定する尺度として小林・高橋（1987a）の作成したものがある。しかし、小林・高橋（1987a）の質問紙は中学生を対象に作成されており、妥当性・信頼性の検討もされていないため改訂の必要があると考えられる。

これらのことを踏まえ、本研究では大学生を対象とした暴力欲求を測定する質問紙を作成する。本研究を行うことで、これまで測定することが困難であった大

学生の暴力欲求を測定することが可能になり、反社会的行動に関する研究を行う上での有益な情報が得られると考えられる。

予備調査

【目的】

予備調査では、小林・高橋（1987a）の質問紙を大学生用に改訂するために新たな項目を収集することを目的とする。小林・高橋（1987a）の項目は中学生用に収集されたため、大学生から収集される項目の内容は小林・高橋（1987a）の項目とは異なると予想される。

【方法】

1. 調査対象

首都圏の私立大学に在籍する学生120名を対象に調査を行った。また、記入もれや記入ミスがあった項目を除外し、合計120名（男子56名：平均年齢＝21.09, SD＝2.36；女子64名：平均年齢＝20.74, SD＝1.91；有効回答率100%）の回答を分析対象とした。

2. 調査材料

「あなたはどんなときに暴力的な行為を行いたくなりますか」という質問に自由記述で解答を求めた。

3. 手続き

質問紙への協力は強制ではないことを説明し、教示文を読んだ上で回答するように求めた。予備調査は大学の講義時間を用いて集団で実施された。

【結果】

収集された項目に関して、まず著者によって項目の内容が重複しないように整理された。その結果66項目が抽出された。次に、収集された66項目と小林・高橋（1987a）の28項目に関して、調査者と心理学を専攻する大学生1名による項目の整理検討を行った。その基準は①項目の内容が重複している項目を整理する、②学生にとって違和感のない表現、内容にするという2点であった。その結果、小

林・高橋（1987a）に新たな19項目を加えた合計47項目が学生用暴力欲求質問紙の項目として抽出された（Table 1）。

学生用暴力欲求質問紙の作成：因子構造，妥当性，信頼性に関する検討

【目 的】

予備調査で示唆されたように，中学生と大学生の暴力欲求に関わる要因には違いがあると考えられる。特に，中学生用に用いられた項目でも大学生には回答に偏りが見られ項目分析で抽出されない項目があると考えられる。また，中学生用と大学生用では因子構造も異なることが予想される。そこで本調査では，予備調査で作成した学生用暴力欲求質問紙の項目を用いて項目分析・因子分析を行い，項目の精選および質問項目の因子構造を明らかにすることを目的とした。また，質問紙の妥当性を検討するためにBAQ（安藤ら，1999）との関連を検討するとともに，信頼性について検討することを目的とした。さらに性差に関して，安藤ら（1999）は男性のほうが女性よりも攻撃性の高いことを報告している。本研究でも同様に暴力欲求は男性のほうが女性よりも高いと考えられる。そこで，学生用暴力欲求質問紙の年齢，性別の差についても検討を行う。

【方 法】

1. 調査対象

首都圏の私立大学に在籍する学生373名を対象に調査を行った。また，記入もれや記入ミスがあった項目を除外し，合計359名（男子194名：平均年齢=20.53，SD=1.93；女子158名：平均年齢=20.64，SD=2.27；性別未記入7名：有効回答率96.25%）の回答を分析対象とした。

2. 調査材料

① 学生用暴力欲求質問紙

予備調査によって収集された学生用暴力欲求質問紙の47項目を用いた。これらの項目群は，首都圏私立大学の学生を対象に行われた自由記述によって収集された項目の中で小林・高橋（1987a）の28項目に重複しない新たな19項目を加えた合計47項目からなっている。

Table 1 学生用暴力欲求質問紙に用いられた項目

	項 目 内 容
	1 自分勝手な人を見ると何となくやっつけたくなる。
N	2 自分の思い通りに物事が運ばないと暴力的に振る舞いたくなる。
	3 何となく学校の施設をわざと壊したことがある。
	4 先輩にあいつをなぐれといわれるとやらざるをえない。
N	5 怒られると暴力的にふるまいたくなる。
	6 自分が仲間の一員でないと感じるといらだち暴力的にふるまいたくなる。
N,R	7 自分が明らかに分かっていることを指摘されても暴力的にふるまいたくならない。
	8 人を殴ったり、いじめたりしているのを見ると自分もやりたくなる。
	9 睡眠不足のとき、いらだち暴力的な気分になる。
N	10 言っていることとやっつてることの違う人を見ると暴力的にふるまいたくなる。
	11 自分に自信がもてなくなるといらだち暴力的にふるまいたくなる。
N	12 自分の納得できない扱いを受けると暴力的にふるまいたくなる。
	13 馬鹿にされたり侮辱されたりするといらだち、相手をやっつけたくなる。
	14 わざと学校の器物をこわしてみたいことがある。
N	15 体がなまっていると暴力的にふるまいたくなる。
	16 仲間のリーダーにあいつを殴れといわれるとやらざるをえない。
N,R	17 何もかも嫌になっても暴力的にふるまいたくならない。
	18 自分を受け入れてくれないといらだち暴力的にふるまいたくなる。
	19 人が殴られたり、いじめられたりしているのを見るのは面白い。
N,R	20 お腹がすいても暴力的にふるまいたくならない。
	21 つかれて休みたいときいらだち暴力的にふるまいたくなる。
N,R	22 解決不可能な問題に直面しても暴力的にふるまいたくならない。
	23 自分が駄目になるような感じがするといらだち暴力的にふるまいたくなる。
	24 自分に敵意を抱いていると思うといらだち相手をやっつけたくなる。
N,R	25 人から偉そうに命令されても暴力的にふるまいたくならない。
	26 何となく人を殴ったり、いじめたりしたくなることがある。
N,R	27 大切な人（もの）を傷つけられても暴力的にふるまいたくならない。
	28 仲間にあいつを殴れといわれるとやらざるをえない。
N,R	29 他人の自分勝手なふるまいで被害を受けても暴力的にふるまいたくならない。
	30 テレビや映画の殴り合いの場面を見ると自分もやりたくなる。
	31 何かにつけ人より劣ると思うといらだち暴力的にふるまいたくなる。
N,R	32 努力が報われなくても暴力的にふるまいたくならない。
	33 何となく人を徹底的に殴りたくなることがある。
N	34 相手の自分に対する怒りが納得できないものだとし暴力的にふるまいたくなる。
	35 自分の存在を認めてくれないといらだち暴力的にふるまいたくなる。
N	36 自分ではどうしようもないことで非難されると暴力的にふるまいたくなる。
N	37 善意で接したのに、それを悪意ととられると暴力的にふるまいたくなる。
	38 この先何が起るかわからなくなるといらだち暴力的にふるまいたくなる。
	39 自分がやりたいことをじゃまされるといらだち暴力的にふるまいたくなる。
N,R	40 人に裏切られても暴力的にふるまいたくならない。
	41 自分を重要視してくれないといらだち暴力的にふるまいたくなる。
	42 のろまでくずな人を見ると何となくやっつけたくなる。
N,R	43 長時間待たされても暴力的にふるまいたくならない。
	44 自分を理解してくれないといらだち暴力的にふるまいたくなる。
	45 無視されるといらだち暴力的にふるまいたくなる。
N	46 成功した人を見ると何となくやっつけたくなる。
	47 いい子ぶっている人を見ると何となくやっつけたくなる。

N=予備調査において新たに得られた項目, R=逆転項目

② 日本語版 BAQ

ア藤ら（1999）によって作成された24項目を用いた。BAQはタイプA行動パターンの1つである攻撃性を測定するために作成されたものである。この質問紙は「身体的攻撃」、「短気」、「敵意」、「言語的攻撃」の4因子からなっている。

3. 手続き

質問項目に対して自分がどれくらいあてはまるかを5段階（全く当てはまらない：0点，あまり当てはまらない：1点，どちらともいえない：3点，だいたいあてはまる：4点，非常によくあてはまる：5点）で評定を求めた。

調査は被調査者の受講する講義の時間などを用いて集団で実施された。まず，各自教示文を読んだ上で質問に回答するよう求めた。また，質問紙への協力は任意として実施した。なお，調査中の質問などに対しては著者が対応した。

【結 果】

1. 項目分析による項目の選定

調査に用いた47項目の評定に偏りがないか検討するために，全47項目について，平均得点＋標準偏差，平均得点－標準偏差の値を用いて項目分析を行った。その結果，平均＋標準偏差の値が5以上の項目，および平均－標準偏差の値が1以下の24項目は分布に偏りがあると判断して以下の分析では用いられなかった。

2. 尺度の因子構造

項目分析によって抽出された23項目の因子構造を検討するために，5段階評定の値を用いて主因子法，バリマックス回転による因子分析を行った。その結果，まず固有値1.00以上の3因子について，因子負荷量が.40以下の1項目と，2因子以上に因子負荷量が.40以上であり，解釈が不可能であると判断された2項目を以下の分析から除いた。次に，この20項目について，5段階評定の値を用いて，因子数を3に指定した上で，主因子法，バリマックス回転による因子分析を行った。その結果，3因子20項目（累積寄与率52.8%）が学生用暴力欲求質問紙として抽出された。抽出された因子とそれに含まれる項目（因子負荷量が.40以上の項目），および各因子の寄与率， α 係数をまとめたものがTable 2である。第I因子には合計13項目が含まれ，その内容は「18.無視されるといらだち暴力的にふるまいたくなる (.77)」，「13.相手の自分に対する怒りが納得できないものと暴力的にふるまいたくなる (.73)」，「19.自分を理解してくれないといらだち暴力的にふるまいたくなる (.73)」などといった日常よく経験するような他者が

Table 2 学生用暴力欲求質問紙の因子分析結果

(有効サンプル=359)		因子負荷量			
質問項目		I	II	III	共通性
I. 日常的暴力誘発(13項目, $\alpha = .91$)					
N	18 無視されるといらいだち暴力的にふるまいたくなる.	.77	.02	.20	.64
N	13 相手の自分に対する怒りが納得できないものと暴力的にふるまいたくなる.	.73	.19	.02	.57
N	19 自分を理解してくれないといらいだち暴力的にふるまいたくなる.	.73	.05	.21	.58
N	14 自分ではどうしようもないことで非難されると暴力的にふるまいたくなる.	.73	.20	.07	.58
N	20 いい子ぶっている人を見ると何となくやっつけたくなる.	.68	.08	.07	.47
N	15 善意で接したのに、それを悪意とられると暴力的にふるまいたくなる.	.66	.26	.18	.53
N	16 自分がやりたいことをじゃまされるといらいだち暴力的にふるまいたくなる.	.66	.24	.13	.51
N	5 自分の納得できない扱いを受けると暴力的にふるまいたくなる.	.63	.34	.10	.52
N	9 自分に敵意を抱いていると思うといらいだち相手をやっつけたくなる.	.62	.22	.17	.46
N	4 言っていることとやっていることに違う人を見ると暴力的にふるまいたくなる.	.59	.38	.03	.49
N	2 怒られると暴力的にふるまいたくなる.	.58	.11	.18	.38
N	1 自分の思い通り物事が運ばないと暴力的にふるまいたくなる.	.58	.22	.25	.45
N	6 馬鹿にされたり侮辱されたりするといらいだち、相手をやっつけたくなる.	.54	.42	.13	.48
II. 被害(3項目, $\alpha = .66$)					
N,R	10 大切な人(もの)を傷つけられても暴力的にふるまいたくならない.	.20	.79	-.11	.68
N,R	11 他人の自分勝手なふるまいで被害を受けても暴力的にふるまいたくならない.	.29	.71	.15	.61
N,R	17 人に裏切られても暴力的にふるまいたくならない.	.26	.50	.35	.44
III. 自己欲求不満(4項目, $\alpha = .68$)					
N,R	7 何もかも嫌になっても暴力的にふるまいたくならない.	.19	-.05	.72	.56
N,R	8 解決不可能な問題に直面しても暴力的にふるまいたくならない.	.07	.28	.70	.57
N,R	3 自分が明らかに分かっていることを指摘されても暴力的にふるまいたくならない.	.15	-.13	.64	.45
N,R	12 努力が報われなくても暴力的にふるまいたくならない.	.17	.39	.63	.59
因子負荷量の2乗和		7.63	1.66	1.28	
寄与率(%)		38.15	8.30	6.40	
累積寄与率(%)		38.15	46.45	52.85	

N=予備調査において新たに得られた項目, R=逆転項目

らの挑発や自己の欲求が満たされない状態に関わりのある項目であった。したがってこの因子は「日常的暴力誘発」に関する因子であると考えられる(寄与率38.15%, $\alpha = .91$)。第II因子には合計3項目が含まれ、その内容は「10.大

切な人（もの）を傷つけられても暴力的にふるまいたくならない(.79)」、「11.他人の自分勝手なふるまいで被害を受けても暴力的にふるまいたくならない (.71)」、「17.人に裏切られても暴力的にふるまいたくならない (.50)」などといった他者からの明らかな被害を受ける状態に関わりのある項目であった。したがって、この因子は「被害」に関する因子であると考えることができる（寄与率8.30%， $\alpha = .66$ ）。第Ⅲ因子には合計4項目が含まれ、その内容は「7.何もかも嫌になっても暴力的にふるまいたくならない (.72)」、「8.解決不可能な問題に直面しても暴力的にふるまいたくならない (.70)」、「3.自分が明らかに分かっていることを指摘されても暴力的にふるまいたくならない (.64)」などといった自分の欲求が満たされない状態に関わりのある項目であった。したがって、この因子は「自己欲求不満」に関する因子であると考えることができる（寄与率6.40%， $\alpha = .68$ ）。以上、学生用暴力欲求質問紙（3因子，20項目）が作成された。

3. 学生用暴力欲求質問紙の信頼性・妥当性の検討

学生用暴力欲求質問紙の信頼性を検討するために、全項目と各因子項目を用いてクロンバックの α 係数を算出した。その結果、学生用暴力欲求質問紙の各因子の α 係数の範囲は、.66～.91といずれも比較的高い水準にあり、高い内的整合性が認められた。このことから、各因子は下位尺度としての信頼性を有することが明らかにされた。

学生用暴力欲求質問紙の妥当性を検討するために学生用暴力欲求質問紙および下位尺度の得点とBAQ（安藤他，1999）の総得点の相関係数を算出した（Table 3）。その結果、暴力欲求の総得点はBAQの総得点と中程度の正相関関係（ $r = .53$ ）にあることが示された。また同様に、日常的暴力挑発得点はBAQの総得点と中程度の正相関関係（ $r = .53$ ）に、被害得点はBAQの総得点と弱い正相関関係（ $r = .37$ ）に、自己欲求不満得点はBAQの総得点と弱い正相関関係（ $r = .28$ ）にあることが明らかにされた。以上の結果から、学生用暴力欲求質問紙はある程度の妥当性を有することが示された。

Table 3 学生用暴力欲求質問紙の全体得点および各下位尺度得点とBAQの総得点との相関
(有効サンプル数=359)

	全体得点	日常的暴力誘発	被害	自己欲求不満
BAQ	.53**	.53**	.37**	.28**

BAQ=Buss-Perry 攻撃性質問紙

* $p < .05$, ** $p < .01$

4. 因子間の相関

抽出された3因子間の相関を算出した (Table 4)。その結果、日常的暴力誘発-被害 ($r=.58$)、被害-自己欲求不満 ($r=.41$)、自己欲求不満-日常的暴力誘発 ($r=.35$) すべてに有意な相関が認められた。以上の結果から、

各因子はある程度相関は高いが全く同一の内容を測定しているものではないことが示された。これらの結果から、本研究で作成された学生用暴力欲求質問紙が3因子20項目からなり、かつ信頼性・妥当性を持つことが明らかにされた。

Table 4 学生用暴力欲求質問紙の各因子間の相関

	I	II	III
I. 日常的暴力誘発	1.00	.58	.41
II. 被害		1.00	.35
III. 自己欲求不満			1.00

5. 学生用暴力欲求質問紙における性別と年齢差

学生用暴力欲求質問紙の全体得点と下位尺度得点について、性別と年齢を要因とした2 (男, 女) × 5 (19歳以下, 20歳, 21歳, 22歳, 23歳以上) の分散分析を行った (Table 5)。その結果、性別については全体得点および全ての下位尺度得点において有意な主効果が認められた (全体得点: $F [1.339]=14.13, p<.01$; 日常的暴力誘発: $F [1.339]=9.99, p<.01$; 被害: $F [1.339]=25.50, p<.01$; 自己欲求不満: $F [1.339]=3.17, p<.10$)。全体得点と3つの下位尺度得点全てに関して女性に比べて男性が有意に高い得点であった ($p<.05$)。以上の結果から、学生用暴力欲求質問紙の得点は男子の方が女子よりも高いことが明らかにされた。また、

Table 5 学生用暴力欲求質問紙の性別および年齢別の平均値と分散分析結果

(有効サンプル数=359)

尺度項目	19歳以下		20歳		21歳		22歳		23歳以上		性別	年齢	交互作用
	男(63)	女(57)	男(56)	女(29)	男(30)	女(41)	男(16)	女(11)	男(27)	女(19)			
全体得点	51.06 (14.39)	45.96 (11.75)	53.80 (14.62)	50.14 (12.53)	52.60 (13.40)	49.22 (12.37)	52.31 (13.81)	43.73 (19.82)	49.93 (14.27)	39.26 (9.95)	14.13**	2.53*	0.70n.s.
I. 日常暴力誘発	31.08 (10.92)	26.96 (8.38)	32.61 (11.98)	30.97 (8.36)	31.50 (9.80)	29.83 (9.27)	31.81 (10.58)	27.09 (11.25)	30.37 (9.83)	22.695 (6.62)	9.99**	2.18†	0.80n.s.
II. 被害	9.78 (2.18)	8.79 (2.71)	11.27 (2.53)	8.69 (2.39)	10.40 (2.42)	9.61 (2.35)	9.81 (2.74)	7.91 (3.48)	10.07 (2.83)	7.37 (2.71)	25.50**	2.15†	1.27n.s.
III. 自己欲求不満	10.21 (3.85)	10.21 (3.65)	10.92 (3.29)	10.48 (3.44)	10.70 (4.20)	9.78 (2.56)	10.69 (3.53)	8.73 (3.80)	9.48 (3.61)	8.95† (1.99)	3.17†	1.42	0.51n.s.

() 内は標準偏差

† $p<.10$, * $p<.05$, ** $p<.01$

年齢については全体得点，第Ⅰ因子，第Ⅱ因子に有意な主効果が認められた（総得点： $F[4.339]=2.55$ ， $p<.05$ ；日常的暴力誘発： $F[4.339]=2.18$ ， $p<.10$ ；被害： $F[4.339]=2.15$ ， $p<.10$ ）。Tukey法による多重比較の結果，全体得点に関して23歳以上に比べて20歳が有意に高い得点であった（ $p<.05$ ）。以上の結果から，全体的に暴力欲求質問紙の得点は20歳が最も高いことが明らかにされた。

【総合考察】

本研究で作成された学生用暴力欲求質問紙は，「日常的暴力誘発」，「被害」，「自己欲求不満」の3因子からなり，信頼性・妥当性をもつ質問紙であることが明らかにされた。学生用暴力欲求質問紙は，これまで作成されてきた質問紙とは因子構造が異なることも示唆された。また，小林・高橋（1987a）が中学生用に作成した暴力欲求質問紙とは項目が異なり，中学生と大学生の暴力欲求に関わる要因に違いがあることが明らかにされた。暴力欲求の年齢差，性差に関してはこれまで報告されてきたように，年齢が高い程暴力欲求は低く，男性の暴力欲求が女性の暴力欲求よりも高いという結果が得られた。

項目分析において中学生用に用いられていた項目が大幅に削除された。このことは，大学生と中学生の発達段階や生活スタイルによって暴力欲求に関わる要因が違うことを示唆している。本研究の結果から，大学生の暴力欲求は「日常的暴力誘発」，「被害」，「自己欲求不満」から構成されていることが明らかにされた。これらは，小林・高橋（1987a），安藤ら（1999），大淵ら（1999）が作成した既存の質問紙とは異なる内容であった。小林・高橋（1987a）が中学生用に作成した暴力欲求質問紙には「相手の属性・挑発」，「潜在暴力欲求」，「他者命令」，「所属・承認欲求阻止」，「攻撃モデル」，「生理的欲求阻止」，「自信喪失」が含まれている。本研究では大学生用に作成したため，小林・高橋（1987a）の因子の内容と異なる結果になったものと考えられる。また，安藤ら（1999）がタイプA行動の一つの特性である攻撃性を測定するために作成されたBAQには「身体的攻撃」，「短気」，「敵意」，「言語的攻撃」が含まれている。本研究の質問紙が挑発場面に関する項目が多いのに対して，安藤ら（1999）が作成したBAQには挑発場面に関する質問は「身体的攻撃」，「言語的攻撃」に含まれ，他の因子は個人の特性に関する項目から構成されているため，因子の内容に違いでたものと考えられる。さらに，大淵ら（1999）が攻撃行動を機能的に分類するために作成したFASには，「回避」，「強制・影響」，「制裁・報復」，「自己表現」の内容が含まれてい

る。FASは、各因子に関連する人格特性があることを想定しているため、個人の人格特性を測定する項目によって構成されている。この理由から、本研究で作成された学生用暴力欲求質問紙の因子と大きな違いがでたものと考えられる。

また、各因子の項目をみると、日常的暴力誘発因子が小林・高橋(1987a)の項目によって構成され、被害因子と自己欲求不満因子が新たに得られた項目によって構成されている。この結果から、中学生を対象にした小林・高橋(1987a)の項目と大学生を対象に得られた新たな項目が違う内容を測定していると考えられる。つまり、先に述べたように中学生と大学生では暴力欲求の内容が異なることが推測され、暴力欲求の測定に関しては発達的な段階を考慮した質問紙を使用する必要があると考えられる。

性差については、男性の方が女性より暴力欲求を強く感じていることが明らかにされた。これは、小林・高橋(1987a)、安藤ら(1999)、尾木(2000)と類似する結果であった。大淵ら(1999)は性差について検討していないため比較が出来なが、これまでの結果を総合すると暴力欲求に関しては男性の方が女性より高いと考えられる。

年齢差については、20歳をピークに下降していくことが明らかにされた。小林・高橋(1987a)、安藤ら(1999)、大淵ら(1999)は、年齢差については検討をしておらず比較は出来ない。一般的に青年期を過ぎると攻撃性は下降するといわれており、今回の結果はこれに一致する結果が得られたといえる。以上のことから、①年齢層に応じて適切な質問紙を使用する必要がある、②男性の方が女性より暴力欲求が高いといえる。

今後は、暴力欲求の高いことが明らかにされた男子学生を対象にさらなる検討を加えていく必要があると考えられる。小宮山(1983, 1986)は教師と母親に対する暴力欲求を発生させる要因について検討を行い、暴力欲求をもっている少年の特性や教師と母親の関わり方について明らかにしている。しかし、暴力欲求が暴力行動に至る心理的過程については検討していない。

暴力行動に関する研究においては、暴力欲求は直接暴力行動につながるのではなく、認知過程を経て暴力行動として表出されると考えられ、暴力欲求と同時に暴力行動に至る心理的過程が重要な役割を果たすと考えられる。これまでに、小林・高橋(1987b, 1988)は暴力行動を制御する認知過程を調査しており、今後はそういった観点から暴力欲求が暴力行動に至る心理的過程についてより詳細な検討を加えていく必要があると考えられる。

【文 献】

- 安香 宏 1998 非行における非社会的特質の変容 犯罪と非行, 116, 59-90.
- 安藤明人・曾我洋子・山崎勝之・島井哲志・嶋田洋徳・宇津木成介・大芦 治・坂井明子
1999 日本語版 Buss-Perry 攻撃性質問紙 (BAQ) の作成と妥当性, 信頼性の検討 心理学研究, 70, 384-392.
- 法務省法務総合研究所(編) 1998 平成十年度版犯罪白書—少年非行の動向と非行少年の処遇— 大蔵省印刷局
- 小林寿一・高橋良彰 1987a 暴力に対する中学生の意識・態度に関する研究：1. 暴力欲求の発現要因の構造化 科学警察研究所研究報告防犯少年編, 28, 15-26.
- 小林寿一・高橋良彰 1987b 暴力に対する中学生の意識・態度に関する研究：2. 暴力抑制要因の検討 科学警察研究所研究報告防犯少年編, 28, 109-120.
- 小林寿一・高橋良彰 1988 暴力に対する中学生の意識・態度に関する研究：3. 重回帰分析による暴力規定因の検討 科学警察研究所研究報告防犯少年編, 29, 131-136.
- 小宮山 要 1983 中学生の母親に対する暴力欲求と母親関係, 学校適応, 価値観との関係 科学警察研究所報告防犯少年編, 24, 162-169.
- 小宮山 要 1986 対教師暴力の発生過程に関する事例分析 科学警察研究所研究報告防犯少年編, 27, 161-168.
- 尾木直樹 2000 子どもの危機をどう見るか 岩波書店
- 大淵憲一・山入端津由・藤原則隆 1999 機能的攻撃性尺度 (FAS) 作成の試み：暴力犯罪・非行との関係 犯罪心理学研究, 37, 1-13.
- 沢登俊雄 1999 少年法：基本理念から改正問題まで 中公新書
- 鈴木真悟・西村春夫・高橋良彰 1989 高校生における非行化の条件 西村春夫(編) 少年非行：その実態・原因・対応の分析 1975～1988 ソフトサイエンス社 Pp.110-118.
- 高橋良彰・西村春夫・鈴木真悟 1982 中学生の生徒間暴力についての分析：1. 被害者の社会心理学的特性 科学警察研究所研究報告防犯少年編, 23, 108-122.